

はるかなる唄

桜井 政男¹

フォーククルセダーズが歌った『イムジン河』は、1970年に大学を卒業した私たちの思い出の歌である。久しく放送禁止歌に指定されていたとかで聴く機会を持たなかったのだが、CDも復刻され、'05年正月に上映された映画『パッチギ』（監督井筒和幸、制作シネカノン）では主題歌として蘇った。この映画は日本と韓国とにまたがる当時の青春群像を描いていて、その迫力と感動に私は徐々に映画の魅力を実感させられた。それは歌や時代がただ懐かしいという感情からではなかった。

昨年の交流会で私たちは、統一展望台からイムジン河を眺める機会に恵まれ、二つに分断された両国の境界線を目の当たりにした。そして多くの韓国の友人たちと交流し、その後本を読み、知識も深めたのだが、おそらくこうした積み重ねが、ひとつの映画により強い感動を覚えさせたのだろう。韓国のテレビドラマ『大長今』（日本題名『チャングムの誓い』）を観るときも、昌徳宮の秘園や民俗村など訪れたことがある場面が出てくると、急に身近な感覚でドラマの中に入って行ける。鑑賞という行為は、経験の積み重ねによってより効果を発揮するのだろうか。

今年8月の交流会からも私は大きな影響を受けた。韓国での昨年の交流と歓待のようにことがうまく運ぶか心配しながら、李先生と再会した。その夜、松本市は突然の豪雨で松本ぼんぼんの踊りは途中中止になってしまった。私の気持ちは穏やかではなかったが、穂高に移動してからは「案ずるより生むがやすし」の諺どおり、多くの皆さんの知恵と情熱で見事な交流会になった。大勢の懐かしい方々に再会できたことも、信州の自然を満喫し韓国料理と日本蕎麦に舌鼓をうったこともこの交流会ならではの体験であった。

韓国料理を頂きながら、話題はチャングムの宮廷料理に及び、そしてテレビドラマ『許浚』（ホジュン）へと発展した。韓国でテレビドラマとして人気を集めたというこの作品が、後に小説に書かれて日本語に翻訳されているということそ

¹ 信州大学人文学部英米文学科1回生。信州大学人文学部同窓会副会長。

の時はじめて知った。交流会のすぐ後に、私はこの小説を持っている友人から本を借りてさっそく読んでみた。友人は翻訳者の娘さんがかつて信州大学へ留学していたことがあると教えてくれたが、翻訳者の朴氏があとがきで名前をあげた協力者の中には、娘さんの他にも私が個人的に知っている人の名前もあって、人間関係の意外性に驚かされたことだった。

この本の日本語出版に至るまでの経過も書かれているが、出版には大分苦労された様子だ。売れそうな本ならいくらでも出版する日本の出版背景があるからだろうが、最終的には主に参考書を手掛けている桐原書店から出版された。

この小説は許浚の運命と李朝時代の激動を描いていて、読んでゆくとたちまち虜になってしまう時代小説である。李王朝社会もなんという差別と不正義が横行した時代であることかと感じながら、それに立ち向かう勇氣ある人々の姿に感動して読み終えた。

最近たまたま針治療を受ける機会があつて、治療院の先生から許浚が著した『東医宝鑑』がいまでも役立っていることを教えられた。秀吉の朝鮮侵略の時代に書かれたこの書物がそれほど貴重で長い生命力を持っていることを私は知らなかったのだ。現在の韓国の教科書には許浚の姿が大きく取り上げられていることを知り、私は10月に行われた勤務先の高校の文化祭で、韓国の文化や歴史や交流について紹介するコーナーを受け持った。そこでは「イムジン河」、「パッチギ」、「大長今」などの歌やドラマをはじめ、江戸時代に12回も派遣された朝鮮通信使の歴史や、許浚の業績やその小説を紹介した。かつて「イムジン河」を歌ったり聴いたりした人たちは、この歌が放送禁止歌になった意味を感じ取ってくれたらどうか。

私にとってこの歌は、はるかなる唄であり、ここからさらに一歩進み出そうという気にさせてくれる唄なのである。